
最強を目指したその結果

蓮椰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強を目指したその結果

【Nコード】

N73030

【作者名】

蓮椰

【あらすじ】

世界の綻びにより亜空間が発生し、乗っていた飛行機が吸い込まれてしまった。行き場をなくした飛行機の中の人間たちは、神様たちによってそれぞれ異世界に飛ばされることになった。これは、その中の一人のお話です。

『とりあえず、畑でもつくろうかな。』のユニークアクセス1万越

え御礼企画です。

11月6日、タイトルを変えました。

プロローグ（亜空間発生）（前書き）

プロローグは『畑』と同じですので、飛ばしてもかまいません。

プロローグ（亜空間発生）

神や精霊と呼ばれる存在が、多くいる聖域にて、話し合いという名の神通力のぶつけ合いが起きていた。

通常、神通力をぶつけ合うことで新たな相乗効果や神が発生する。しかし、今回の場合は誰の力が強いかを競うためだけに行われている。

所謂、ただのケンカである。

もちろん、それは良くないことの訳で……。

「大馬鹿者！何をやってるんじゃない！」

神々をまとめる大神に神通力のぶつけ合いを発見をされてしまった。さらに悪いことに、大神は怒鳴り声とともに、神通力を放ってしまった。

大神の力がトドメとなり、世界に綻びが生じた。綻びは、亜空間をつくりだした。

亜空間は放っておくと、広がり世界を飲み込んでしまう。

「皆の者、一気に塞ぐのじゃ」

慌てて、大神を筆頭に周辺にいる神々（神通力のぶつけ合いをしていた神・傍観していた神）が亜空間の入り口をふさいでいく。あつという間に亜空間が小さくなっていく。

しかし、あと少しというところで、空中を高速移動する物体が中に吸い込まれるように、亜空間に入ってしまった。

小さくなった亜空間の中で、異物を探し出すのが容易かったが……

「コレ、人間の飛行機じゃないですか？」

「『飛行機』とはなんじゃ？」

「アレですよ。人間が沢山のっている乗り物ですよ。」

よく目を凝らしてみると、中には、人間の魂がひしめき合っている。そのまま、外に出すと、すぐに飛行機は落下してしまうだろう。

黄泉の神曰く、「この人間達は寿命が尽きていないから、そのまま輪廻に回せない。」

時の神曰く、「神がかかわっていることで、時間を戻せるわけないでしょう。」

どうやら、解決策がないようです。このまま、魂ごと消滅させるのは良くないし（自分たちのせいで多くの魂が消えるのは、良心が痛む。）

繋ぎの神曰く、「異世界に、送ればいいんじゃないですか？」

ということ、神々は人間の魂を異世界に丸投げすることにした。

プロローグ（亜空間発生）（後書き）

次話から、オリジナルです。

1 世界からの高飛びした（前書き）

ちょっとシリアスです。

1・世界からの高飛びした

黒神饗人^{くろかみ きょうと}は、海外へ高飛び中だった。

現在、その高飛びから一時帰国のため、飛行機内にいた。

黒神饗人は、犯罪組織のリーダー兼、経理担当だった。

彼のグループは、スリや置き引き・空き巣などの窃盗から、オレオレ詐欺などを含めた詐欺など、日本で起こせるあらゆる犯罪の斡旋をしてきた。

『犯罪の初心者』にコツを教え、その後上納金を得る。時には、殺人の隠蔽工作を行うこともあった。

あらゆる犯罪といっても、麻薬だけには手を出さなかった。

…… 確実に売人もクスリに落ちていく。売り物のクスリに手を出されるのが嫌だったからだ。

この組織は、換算なる秘密主義で、余計な情報は流れないようになっている。

特に組織の下っ端には、饗人の姿はおろか、幹部の人間の姿すら見たことがないだろう。

しかし、情報は漏れるときには、漏れるものだ。

組織の幹部が、大失敗をして警察に捕まった。
つかまった幹部は、自分の刑を軽くするために、組織の情報を漏らした。

組織の幹部は漏れなく、警察に捕まった。

響人の情報も警察に売られ、指名手配となった。

ただ、響人の場合、居場所と顔については幹部たちにも隠していたため、すぐにはつかまらなかった。

運よく、別人な名前で取得しておいたパスポートがあり、顔もばれていないので、今のうちに海外に逃亡をしておこうと思

ったのだ。

計画は、成功した。持ち出した資金を使い、シンガポールに新たな拠点をつくった。

しかし、10年たった今、問題が発生した。

パスポートである。

今は、商業ビザを使っているが、10年経ったので、パスポートの書き換えが必要になったのだ。

響人は部下たちを信用していなかったので、幹部たちにも顔を知られないようにしていた。

危ないのは声くらいだが、マスクでもすれば十分隠せるだろう。

パスポートも元々いた人間になりかわってつくったので、本物である。

（成り代わった人間は身寄りが無く、誰にも知られないように、コンクリートにつめた。）

日本に戻るのに、なんら問題はない。

そう、問題は無いはずだ。

でも、さっきから感じる悪寒はなんだろう。

響人は、自分の勘を信じるようにしているが、逃れようにも空の上
……

そうしているうちに、機内が闇に包まれた。

響人は真っ白い世界にいた。

どこをみても白く、自分の影すらない。

白い中で、さらに白いもやのようなものが作られた。

白いもやの中から、人が二人現れた。

「こんにちは、人間。」
「こんにちは、ヒト。」

服装も髪も真っ白な人と、いろいろな動物が混ざったような色の服を着た生意気そうな少年が現れた。

「あなたは、今の世界に戻れなくなりました。そのため、違う世界に行って頂きます。」
真っ白い人は、感情のこもらない声で、そういった。

響人は真っ白い人の脳内を疑った。

絶対なんかへんだ。

「よーするに、行けば分かるって！」

少年が言ったが、余計わけが分からない。

「で、ヒトは、どんな風になりたい？」

少年が面白そうにきいた。質問の結果に興味があるようだ。

だから、響人は自分の理想を答えた。

「最強の存在になりたい。」

つよくなりたい。

自分の思い通りに世界を動かしたい。

力が欲しい。

「んんーわかった！それだけでいいの？」

「それだけでいい。」

「人間、欲しいものはないのか？」

今度は白い方が言った。やはりこちらも、響人を試すような視線を向けている。

「御伽噺のような、心躍るものはほしくないのか？」

「じゃあ、とりあえず、三回願いが叶えられる『打ち出の小槌』かな。」

響人は適当に答えた。

「人間、そなたの願いは分かった。今から、異世界におくる。」

叫ぶまもなく、響人の体は白いもやに包まれた。

2・自覚するには時間がかかります（前書き）

暗いです。

2・自覚するには時間がかかります

響人が下を見下ろすと、ファンタジーな世界に出てきそうな、広大な大自然が広がっていた。

少し、全体的に小さいが。

響人は、気がつくと岩の洞窟の中にいた。洞窟の外に出てみると、大きな森と大河が広がっていた。

洞窟は、かなり高度の高いところにあるようだ。
そして、洞窟の岩はとても良く響く材質のようだ。
響人が歩くたびにドスドスいつている。

ふと、響人は足元を見てみた。

……何かの間違いに違いない。
自分の足が恐竜のようだ。

腕を伸ばしてみる。……伸びない。

洞窟は高度があるといっても、全体的に世界が小さく見えるので、飛び降りられるようだ。

飛び降りて、近くの湖を覗いてみた。

水面には、ドラゴンが映っていた。

東洋の龍というより、西洋の悪の象徴の竜である。
饗人は、ドラゴンになっていた。

ドラゴンになって、1週間。
なぜか、まったく、腹が減らなかった。

ドラゴンの体は意外と便利だった。

火を吐きたいと思えば、火が出る。

吹雪をすきたいと思えば、周りの物が凍る。

空を飛びたいと思えば、一気に空を移動できる。

しかし、響人がひとたび歩けば、森が消えた。

羽ばたけば、周りの物が吹き飛んだ。

火を噴けば、森林火災がおきた。

氷を吐き出せば、解除するまで、永久凍土になった。

とても、ドラゴンは最強だった。

でも、とても孤独だった。

森に生き物はいる。響人が目を向けただけで逃げる。実際、動くだけで踏み潰してしまう。

湖にも生き物はいる。火を噴いたときにみんな死んでしまった。空にも生き物はいる。空を飛んだときに、一部の鳥が響人の翼に巻き込まれてしまった。

他人を信用しないで今まで生きてきた響人だが、こんなにも孤独だったことはなかった。

自分の求めた最強はこんなことではなかった。
響人の求めた『強さ』は他の誰かがいてこそ、成り立つものだ。

響人は、今まで、自分ひとりの力で生きてきたつもりだった。
でも、心の奥底に誰かに認めてほしいという気持ちがあることを自
覚した。

2・自覚するには時間がかかります（後書き）

予定では、後3、4話で終わります。

こんな暗さですが、ハッピーエンド目指して頑張ります。

3・打ち出の小槌"（イコール）呪物

最強すぎて、あまりにもつまらないため響人^{きょうと}は元の洞窟に戻ることにした。

洞窟に入ると奥の方から光り輝く何かが見えた。

おもちゃのカナヅチ？

……もしかしたら、打ち出の小槌ってやつだろうか？

<響人の打ち出の小槌の知識>

？一寸法師がもっている。

？3回しか願い事が叶えられない。

？何かに打ち付けて使う。

この知識を元に、響人は打ち出の小槌を観察してみた。

？持ち手に、太鼓の縮小版みたいなものがついている。

？なんだか、色が鮮やか過ぎる。（悪趣味とも言つ）

？持ち手に、丸くて光るガラスのようなものが3粒埋め込まれている。（これが光源となっているようだ。）

？持ち手の先に組みひもが付いている。

？どうやら、現在の自分のドラゴンの手では、組みひもをつめで引っ掛けるしか持ち運びができない。

？ということは、自在に使えない。

結論：試しにちょっと爪で引っ掛けて、振り回して使ってみよう。

本当に使って大丈夫かは分からないが、万が一何かが起こっても自分は竜の身体。影響は受けないだろう。

ということ、響人は小槌を試しに使ってみることにした。

響人は近くの大きな湖にやってきた。

この湖に、小槌を打ち付けて使うのだ。

「この湖は、自分の見たい風景を映し出す水になれ！」

爪で引っ掛けた小槌をブルンブルンと振り回し、小槌を水面に打ち付けた。

すると、一気に水面に波紋が広がり、森の風景を映し出した。

しばらく、水面を見ていると斧や剣を携えた男女が歩いてきた。

つまらないので、一旦小槌をもって洞窟に戻ることにした。

10日後、湖に映っていた男女が饗人の元にやってきた。

4人組の男女は、洞窟の入り口にくると、指差して叫んだ。

「人様にあだなす悪きドラゴンよ。退治してやる」「

どうやら、響人を退治しに来たらしい。

「くられ!!!」

斧を振り回す巨漢の男。

「メテオクラッシャー!!!」

ステッキを振り回し、光の玉をぶつけてくる女。

「この勇者の剣をくられ」

細い剣で、響人の身体を突つつく剣士。

「くたばりな!!!!」

ベチンペチンと叩いてくる、女性の武道家。

一人も、響人に傷をつけることは無かった。

「そんなばかな!？」

「私の最強の技が通じないなんて…」

「勇者の剣が折れた(泣)」(そして、剣士のココロも折れた)

「アタイの拳がやられるなんて!？」

落ち込む4人だが、ステッキ少女が目ざとく響人が持っている、打ち出の小槌を見つけた。

敵が目の前にいるのに、ひそひそ話を始める自称く勇者の一行たち。

『あれって竜の宝じゃなくて?』

『もしかして、あれは竜の心臓かもしれん。』

『もうなんでもいい・・・』

『あれは、何でも願いのかなう魔法の法具かもしれないわ。』

『あれで、倒せるかもしれない!!!』

「コモン・まじっく！」

ステッキ少女がステッキを小槌に向かって振りかざすと、小槌が一直線に少女の下に飛んでいった。

「うふふ。これで形勢逆転よ！」魔法の法具よ、わが願いを叶え、あのドラゴンを滅せよ！」

すると、どうだろう。
打ち出の小槌が光り輝いたかと思うと、ステッキ少女を光が包み込み消えてしまった。

後には、小槌が残るだけである。

「エリッサ！」
斧を持った男が叫ぶ。

「この呪物は、持ち帰って厳重に保管するんだ！」
ココロが元に戻ってきた剣士が慎重論を言った。

「でも、エリッサが！」
武道家の顔も真っ青だ。

「そうするしか、方法はないだろう。エリッサが呪物から、また出てくるかもしれない」

直接触れないように、剣士が剣の先で組みひもを引っ掛けた。
すると、再び小槌は光り出し、光が勇者一行を飲み込んで消えてしまった。

後に残ったのは、小槌と饗人だけである。

このことから、饗人は小槌を極力使わないことに決めた。

3 ・打ち出の小槌Ⅱ（イコール）呪物（後書き）

長くなりそうなので、予定していた分の半分を掲載しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7303o/>

最強を目指したその結果

2010年11月14日19時26分発行